

オーケストラ シンフォニカ 東京

第 45 回

# 定期演奏会

平成 16 年 4 月 12 日 (月) 午後 7:00 開演

第一生命ホール



# プログラム



## 第一部

指揮： 嶋 直 樹

シンフォニア 変口長調 OP18 NO.2

J.C. バッハ(菅原明朗編曲)

I アレグロ・アッサイ

II アンダンテ

III プレスト

「四季」より「6月一舟歌」

P. I. チャイコフスキー(久松祥三編曲)

「カヴァレリア・ルスティカーナ」より

P. マスカーニ(嶋 直樹編曲)

「交響的間奏曲」

## 第二部

指揮： 宮 本 皓 永

春祭りの夜

武井守成

組曲「東への道」

清水保雄

I 中央アジアの印象

II 砂漠の星

III 東への道

## 第三部

指揮： 山 本 雅 三

花のガヴォット

R. カラーチェ

サンタ・ルチア幻想曲

C.G. ワルテル

セレナータ ロマンティカ 「夢! うつつ!」

U. ボッタキアーリ

シンフォニア 「麗しきイタリア」

F. ジェツメ(中野二郎編曲)

# 曲 目 解 説

## 第一 部

### シンフォニア 変口長調 OP18 NO.2

ヨハン・クリスチャン・バッハ(菅原明朗 編曲)

J.C. バッハ (1735年～1782年) は、J.S. バッハ (1685年～1750年) の第11子、末っ子です。イタリアとロンドンで主に活動をし「ロンドンのバッハ」ともいわれていますが大バッハ50歳の時の息子ということで音楽上での父親の影響はさほど受けていないようです。作曲も教会音楽よりはオペラに関心が向いていたらしく、今回演奏します「シンフォニア」も歌劇「ルチオ・シッラ」の序曲として作られたものとのことです。3楽章からなり第2楽章ではマンドリン(原曲ではオーボエ)のソロが入っております。

1764年ロンドンの彼の元を訪問したモーツァルト一家、当時神童ウォルフガング8歳。何度となくウォルフガングはクリスチャンの家を訪ね作曲の手ほどきを受け大きく影響を受けたといわれ、クリスチャン46歳の死に際して「音楽にとって何たる損失」と嘆き悲しんだとの逸話が残っています。

### 「四季」より「6月一舟歌」

ピョートル I. チャイコフスキー(久松祥三 編曲)

P. I. チャイコフスキー (1840年～1893年) には100曲ものピアノ作品が知られていますが、これは36歳の時の作品です。ペテルブルグの音楽月刊誌「ヌーヴェリスト」の付録として1年間、その月の行事や風物を盛り込んだ12曲の小品を書きました。これらはその後まとめられて「四季」と名づけられ曲集として出版されました。また後年、ソビエトの指揮者によって管弦楽用にも編曲されています。

この曲集の中で最も有名とされているのが本日演奏する「6月一舟歌」で夏の夕べの舟遊びを詠ったプレシチエイエフの詩が添えられています。

「岸辺に出よう 我らの足には波がくちづけするだろう 愁いを秘めた星屑が我らの上に輝くだろう」

### 歌劇「カヴァレリア・ルスティカーナ」より「交響的間奏曲」

ピエトロ・マスカーニ(嶋 直樹 編曲)

P. マスカーニ (1863年～1945年) はイタリアの港町のパン屋の息子として生まれました。法律家にさせたかった父親を振り切ってミラノ音楽院に入学はしたものの中退。歌劇団の指揮者として経験を積んだのち南イタリアの音楽学校の教師となりました。歌劇「カヴァレリア・ルスティカーナ(田舎の騎士道)」は、彼が25歳の時に応募した懸賞オペラで第1位の栄冠に輝いた作品です。初演は1890年、「交響的間奏曲」にはパイプオルガンやハープが入っておりキリスト教会での復活祭の雰囲気醸成しています。幕が再び開いてから繰り広げられる惨劇を全く予想もさせない宗教的な緊張感あふれるメロディーは、私達の心を捉えて離しません。

(以上 嶋)

## 第二 部

### 「春祭りの夜」

武井守成

1930年(昭和5年)3月の作品(OP34)です。同年5月のO.S.T第28回定期演奏会にて作曲者(1890年～1950年)自身の指揮により初演されました。その後、1969年(昭和44年)3月のO.S.T第69回定期演奏会でプログラムにのりましたが、それ以来の本当に久しぶりの演奏となります。

この曲は作者のことばとして「春の祭礼の一夜、家の中であって祭とは無関心に物思いに沈む一人の若人を描く」とある様に曲はアンダンテで終始し、春の宵に一人の若者の物憂げな描写がよく出ている作品です。

武井守成氏はマンドリン・ギターの父といわれ、1915年（大正4年）にO.S.T（オルケストラ・シンフォニカ・タケイの略称）を創設して1949年（昭和24年）に没せられるまで、宮内省楽部長・後式部長官という要職にありながら作曲や指揮、文献の収集にと音楽活動と斯界の発展に尽力を続けられました。

さらに、かつてイタリアに遊学し、当時全盛を極めていたマンドリンアンサンプルの形態が究極であるとして、そのまま日本で再現しようと傾注したのでした。その編成とはフルート、クラリネット、マンドリン1・2、マンドラコントラルト、マンドラテノール、リュートモデルノ、マンドロンチェロ、マンドローネ、ギター、バス（ギターローネ）、ピアノとなっています。今回はその編成でお聴きいただきます。

O.S.Tは現在「オルケストラ・シンフォニカ・東京」として、その流れを受け継いでいます。

## 組曲「東への道」

清水保雄

大組曲「日本」第三組曲「東への道」が原題です。作者（1910年～1980年）は1940年（昭和15年）に日本ビクター専属作曲家となり数々の歌謡曲を発表していますが、マンドリンオーケストラの為の作品をも数多く発表していました。主な作品は「飛鳥」「大和への道」「カレッジ・メイツ」「アイヌの印象」「木曾川の印象」「沖縄の印象」等々です。それらの中でも、この「東への道」は非常に雄大なスケールの曲に仕上がっています。

チグリス、ユーフラテス両河の流れる中央アジアは、文明発祥の地としてBC7000年もの昔に栄えたところです。しかし、人々の争いや天変地異により、その遺跡は砂の中に埋もれてしまったそうです。

新たな土地を求めて北へ向かう人たちや、西へ向かう人たちの他に、一部の人たちは東から昇る太陽の方角へと移動し始めたのです。そして気の遠くなるような長い長い年月のあと、ようやくたどり着いた先が私達の住む日本列島でした。そして文化は縄文、弥生と豊かに実り現代へと続いているのです。

この曲は、そうした先人たちの足跡を辿る抒情詩となっています。

### I 「中央アジアの印象」(Andante con Maestoso)

朝がきて日が昇ります。古老は砂漠に立ち昔を偲び乍ら果てしなく続く東への道に思いをはせています。夢と希望を抱いて若者や娘たちが踊り出すと、リズムカルなその踊りに生き生きとした旅の始まりを楽しむかのように、次々と、その輪に加わる人々がいます。やがて夕日は赤々と西の空に沈んでゆきます。

### II 「砂漠の星」(Meno Adagio)

太陽の昇る東への道は決して順調な旅ではありません。どこまでも続く砂丘、照りつける熱射、そして砂嵐。やがて日が落ちるとやってくる静寂……。

見上げれば満天に煌く宝石よりも神秘的な星々々。

### III 「東への道」(Moderato)

荷物を担いだり、馬やラクダの背に揺られての旅は、遠く苦しいものでした。

包（パオ）に寝、ラクダの背中で砂嵐を避け、オアシスの水をすすり乍ら進むのでした。あの星とこの星の間に向かって歩み進めば東への道に通ずるのだと。みんなで励ましあいながら……。

そして一行は大陸の果てに到達しました。船に乗り換えてさらに海を渡り、目指すのは四季のある緑濃き温暖な地ヤマト（倭）でした。

（以上 宮本）

## 第三部

第三部で19世紀後半から20世紀前半に活躍した、イタリアの4人の作曲家の作品をお贈りいたします。3曲はピアノが加わっております。前3曲はマンドリン・オリジナル曲です。

### 花のガヴォット

ラファエーレ・カラージェ

R.カラージェ（1863年～1934年）は南イタリアのナポリで楽器製造業の家に生まれ、ナポリ音楽学校



を卒業しました。彼は作曲・演奏・楽器製作・楽譜出版のいずれにも秀でていましたが、作曲では卒業時最高賞を獲得し、その後ムニエルの後継者と言われるほど優れた多数のマンドリン曲、リュート曲を創出しました。作品中よく知られているものには、マンドリンのための前奏曲第1, 2, 3, 5, 10とリュートのための前奏曲第4, 6, 7, 8, 9, 多数のピアノ二重奏のマンドリン曲、リュート曲、さらにマンドリンとリュートの二重奏曲などがあります。有名な合奏曲・序曲ジェノヴァはピアノ四重奏曲ですが、他の作品でもピアノをマンドリンとともに伴奏以上に駆使しているのが大きな特徴と言えます。彼の作品は二つに分けられ、難しい技巧を駆使する豪壮・雄大な感情に満ちているものと平易な技巧の中に繊細・優雅・愛情を表現したものがあります。今回演奏するこの曲は後者に属するもので、昭和53年O.S.Tの定期演奏会で演奏されています。花の蕾から開いていく優雅なたたずまい、繊細な色や香りを醸し出すような雰囲気のある曲です。

カラーチェは1924年マンドリンとリュートのVirtuoso (卓越した演奏家)として来日しています。楽器製造は息子ジュゼッペに引き継がれ、カラーチェの楽器は現在でも輸入され広く使用されています。

### サンタ・ルチア幻想曲

カルロ・グラツィアーニ＝ワルテル

C. グラツィアーニ＝ワルテル (1851年～1927年) はベルギー・ブリュッセルの生まれでしたが、早くからイタリアに帰化してフィレンツェに住み、当地で没しました。マンドリンの作曲のほかオペラ・映画音楽の作品があり、判っているだけでも433曲あります。マンドリン五重奏をラジオ放送でしばしば行い、作曲・演奏面でマンドリン音楽の発展に大きく貢献しました。

作品で有名なのは「ダンテとペアトリーチェ」ですが、多数の小曲に佳曲が多く、この曲もその一つで、誰もが知っているナポリ民謡のそのメロディーをファンタジックに使って幻想曲とし、まとめています。親しみやすいロマンの薫りのする曲です。

### セレナータ ロマンチカ「夢！うつつ！」

ウーゴ・ボッタキアリ

U. ボッタキアリ (1879年～1944年) はイタリアのカステルライモンドに生まれ、マチェラータ工業学校卒業後、中部イタリアのアドリア海に面した都市ペーザロのロッシーニ音楽院 (当時ピエトロ・マスカーニの指導下にあった) で学びました。1899年在学中にオペラ「影」を作曲し名声をたかめ、その後、彼の作品はイタリア文部省主催の作曲コンクールで金牌をうけたほか各所のコンクールで入賞しています。オーケストラ曲・オペラ・室内楽・吹奏楽・声楽などの多数の作品を作っておりますが、マンドリン曲で有名なものには、「交響的前奏曲」「誓い」「夢の魔術」「愛の悪戯」「追憶」「彷徨える霊」等があります。いずれも叙情的なイタリア・ロマンチズムの代表的な曲であり、さらに本日演奏するセレナータ ロマンチカ「夢！うつつ (幻想)！」は、へ短調に始まりへ長調でしめくくる新しい形式をとり、大きなロマンを展開しています。楽器の取り扱いも巧みで本日はピアノも入った原曲のまま演奏いたします。O.S.Tでは昭和58年に演奏して以来久しぶりの演奏です。その際、本日の指揮者 (山本) がギターソロ部分を演奏した謂われのある曲です。

### シンフォニア「麗しきイタリア」

フランスチェスコ・ジェツメ (中野二郎 編曲)

F. ジェツメ (生、没年不詳) は19世紀末のイタリアの軍楽隊長で、この曲は彼の代表作とされています。原曲は小編成の吹奏楽曲で、中野二郎氏の編曲によるものに、さらに管楽器、ピアノなどを加えて編成を大きくして演奏いたします。この曲の出版は1886年で、その表紙にはローマのサンピエトロ寺院、フィレンツェのヴェッキオ宮、ミラノの大聖堂、ヴェスヴィオ山を望むナポリが描かれています。イタリアは自然の美しさに加え、絵画・彫刻・建築から音楽など芸術・宗教の分野で発展してきた街そのものが芸術であると言われてます。モーツァルトもしばしばイタリアに旅行をして曲想を持って帰っているほどであり、多くの芸術家に愛され、親しまれてきた国です。そのイタリアの美しさ (ラ・ベッラ・イタリア) を作品にして、当時のソルモーナの長官であったアントニオ・ドット・デ・ダウリ氏に捧げられています。

(以上 山本・石黒)

指揮者：○山本雅三 ○宮本皓永 嶋直樹

コンサートマスター：○本間輝樹

第一マンドリン：○本間輝樹 田島明子 城戸かほる 前田啓子  
嶋直樹 新谷文子 新居裕久 富田容子  
田辺理恵

第二マンドリン：諸井美津江 ○藤田正美 木村栄子 中沢敦子  
○後藤俊明 坂井美佐子 中村順子 平賀理恵子  
小川洋子

マンドラコントラウト：○岩片順子 田中倭文子

マンドラテノール：岩片順子 田中倭文子 滝田ふさ子 石井啓之  
渡邊清 佐々木興治 深野靖夫

ギター：宮本紀子 平田陽一 戸次脩 黒崎恵美子  
高橋貴久子 城所俊雄 門田雄二 佐竹眞弓  
澤田行雄

リユートモデルノ：○宮本皓永

マンドチェロ：宮崎泰行 田村美恵子 高梨一弘

マンドローネ：○家城孝治 宮澤栄作

コントラバス：佐藤正 ○石黒不二夫

フルート：・比護いづみ

クラリネット：・品川秀世

ピアノ：・浦畠晶子

打楽器：・秋葉久美子 ・山田俊之

{ ○ ————— 幹事  
・ ————— 賛助出演 }

オーケストラ シンフォニカ 東京 (OST)

連絡先：〒236-0057 横浜市金沢区能見台3-28-6 石黒不二夫

TEL&FAX 045-770-4806

ホームページ：<http://ishii164.net/~ost/>